

## 平岡先生のこと

武田 ちあき

このところ、どういうわけか、平岡先生のことをよく思い出す。

40年以上前、秋田高校の生徒だった時、英語の先生にはいろんなタイプがいた。

「“foreigner”のつづりは『フォレイグナー』と覚えなさい！」と無理にねじこむ（おかげで忘れられない・笑）強引なK女史。

ふだん仏頂面で、でもホームレスに言う“Move on!”というセリフを「立ち止まっちゃいかん！」と訳してみせた時の、本物の警官さながらのリアルな口調が、本人のキャラにぴったり合っていて、すごく説得力のあった（それでやっぱり忘れられない・笑）、怖い老先生。

なかでも平岡先生は破天荒で、「おらは『でもしか先生』だから、英語はできね。でもがんばるから、よろすくな！」と公言していた。

「でもしか先生」というのは、戦後の混乱期に、教育界の人手不足で採用枠が急拡大する中、「先生にでもなるか」、あるいは「先生にしかねれない」と、教員になった人材の意欲や能力の不足を揶揄する言い方。それを、本人みずから名乗るなんて！と、しょっぱなから度肝を抜かれたことをよく覚えている。

「英語はできない」と宣言（？）するくらいあって、難しい箇所でいよいよややこしくなってくると、「ちあき、なんとだ？」と最後は私に振ってくるので（笑）、私も「クラスの最終兵器」として答えねば、とかえって予習が綿密になった。

しかしまた、「英語はできない」と自覚するからこそ、先生は下調べをものすごくよくしたのだろう、とわかる授業をしていた。単語の原意を伝えるために、全身を使って、身振り手振りで、汗かきながらのアクションの、その大きさ、懸命さには、毎時間、啞然とさせられた。

「まったく平岡だば、しがだねごど」と、生意気盛りの私たちも、その情熱につきあって、（できねって言うなだから、間違うかもさね、気をつけねばなねな）と、先生が間違わないか、はらはらしながら、でも笑いながら、まさに一緒に、勉強した。

田舎の高校生が英語という科目に抱く「オシャレ」なイメージを、思いっきり裏切る、その泥臭い教え方。当時の私には、異端というか変わり種に思えたものだ。

それが2020年春、新型コロナウイルス感染症拡大防止策で大学の授業が全面オンライン化された時、気がつくと私は平岡先生になっていた。

慣れないZOOMのリアルタイム配信で、連発するミス。そのたびにサポートしてくれる学生たち。

音声ミュートになっていたことに気づかず話し続ける私に「先生、音出てません！」とチャットやメッセージで伝えてくれたり。視野欠損でカーソルを見失う私に「先生、画面下で固まっちゃってます！マウスじゃなくてタッチパッドでやってみてください！」と教えてくれたり。

「あー、ありがとう！ごめんねー、助かるわ！」と、なりふりかまわず苦手なものと悪戦苦闘するかっこ悪さをさらけ出す私は、まさに平岡先生だった。

ふだん、仕事は完璧主義にこだわりがちだった私だけれど、ここへきて開き直すことを覚えた。

間違いを繰り返すこと、ミスを一通りすること。それはまさに英語という科目の勉強の仕方そのもので、必要なプロセスなのだから、いちいちへこんではいけない。ひとつ間違えば、そのぶん、ひとつ進める。だから、前だけ見ていればいい。

そもそもコロナ禍で、この先の世界や生活がどうなるか、一寸先は真っ暗闇。でもそんなことにへこたれないで、下手だろうが、かっこ悪だろうが、とにかくできることをして、教えるべきことはなんとしてでも伝える。

そういう、前を向く教員の姿、負けない大人の姿を見せることこそが、いまはいちばん大事。

——そういう境地にたどり着いた時、これが平岡先生の姿だったのではないか、これが、先生の伝えたかったことではないのか、といまさらながらに思い当たって、愕然とした。

「んだんだ、やっと、わがっでけだが」と、先生は笑ってくれているかもしれない。

そして、いつのまにか、とっくに私は、平岡先生タイプの教員に、じつはなっていたのかもしれない。

人間としての教師が及ぼす影響、薰陶とは、そのように、無意識のうちに、何十年もの年月をかけて、でも人を根本から、動かすものなのだろう。

AI時代になろうとも、決して代わることのできない、教師の人間力。それが教育の底力であることを、忘れたくはない。

先生、んだべ!?

[2021.10.5 掲載]